

## 陶淵明は南山に何を見ていたのか

小南一郎

陶淵明（陶潜）の文芸活動の基礎について考えるに際して、特に次の二点を重視したいと思う。その第一は、かれが隠逸者であったというより、隠逸者という姿を選び取って生きようとしていたということである。そうした外見を人々に示しつつ生きたことについては、かれを取り巻く政治的な環境が密接に関わっていたのであろう。自分自身が政治的に無害な存在であることを示す必要があった。かれの作品の少なからざる部分から、みずから選んだ隠逸者としての姿を示そうとする意図を見ることができる。

第二の点は、かれが最も重要な問題について、正面から語ろうとしていないことである。かれが生活の基盤を据えていた潯陽の地は、長江下流の揚州、中流域の荊州とともに、当時の政治的動きの中核地点であり、さまざまな事件が起こっていた。しかしかれはそうした事件について、正面から語ろうとはしていない。むしろ意図して沈黙を守っているように見える。そうした沈黙を通して“語られている”ものをどのように扱ったらよいのであろう。

ここで検討を加えようと思う、陶淵明と廬山の慧遠を中心とする人々との関係についても、かれは強いて沈黙を守ろうとしている。潯陽の南方にそびえる廬山が気になっていたに違いない。それは、廬山における精神活動と自分自身のありかたとを対比することに起因するものであっただろう。これまでも、慧遠の仏教思想と陶淵明の五斗米道とを対比する議論はあった。ここでは、慧遠のもとにあった文人集団の文芸活動と陶淵明とその近辺における文学創作とを対比しつつ、両者の差異の中に山水詩形成の動きを見てみたい。謝靈運もまた廬山の文人集団の周辺に位置していたのである。